

経師

今日では「表具屋」とか「表装屋」と呼びますが、巻物・掛け軸・屏風・襖などの新装、あるいは修復を行なう職業(または職人)のことを、かつては「**経師**」と呼んでいました。因みに、「広辞苑」では下記の通り説明されています。

- 【経師】①〔仏教〕三蔵の中の経蔵に通曉した人。
 ②経巻の書写を業とした人。
 ③経巻の表具をする職人。また、書画の幅または屏風・襖などを表具する職人。

この職業は仏教が伝来した6世紀以降に始まったようですが、最初は**朝廷公営の事業**でした。つまり、こうした仕事に従事する公務員が居たわけですから、因みに東大寺大仏開眼供養が行われた天平時代(西暦750年頃)には、200人近くの経師が存在したと正倉院文書に残っているそうです。現在では上記③の意味だけに用いられているようですが、そもそもは**②が主たるもの**であって、素養として①も同時に求められていたという次第です。

奈良朝では、中央政府の役所および大きな寺に**写経所**が設けられ、書写作業が行われました。その際、下記のような大きく三つの職種に分かれており、まさに分業体制と言えますね。

経師……実際に書写をする人
 こうせい
校生……誤字・脱字などの誤りをチェックする人
 そうこう
装潢……巻物として表装をする人 ⇒ 今日の表具・表装屋の始まりです

当時の写経とは功德を積むというよりも、実用的な**仏教のテキスト**を作ることが目的でした。従って、書の上手な者が選抜され、なるだけ多くの枚数の書写をすることが要求されています。能率給あるいは成果主義と呼ばばいいでしょうか、書写された枚数に応じて布が与えられました。

(40枚=1,000行=17,000字を書写すると → 布が1端^{たん}=成人一人分の衣服となる分量)

もちろん、誤字や脱字は禁物で、その場合には逆に上質紙を上納せねばならない決まりでした。明けても暮れても清書をし続けるわけですから、とてつもなく地味で単調な仕事のようなですね。しかし、仏教普及のためには欠かせない作業・要員であり、その意味では仏教興隆の影の主演とも言えるのかも知れません。彼らの果たした役割は、地味ながらも決して小さくはないと思います。それともう一点、**多量の紙が必要になる**はずですが、紙がたいそう貴重品の時代でありましたが、ある程度量産できる製紙技術なり体制が伴っていなければなりません。

さて、平安時代には従来の写経所が消滅したために、経師たちは独立して、有力貴族あるいは寺社との関係を深めました。また、僧侶自身も修行の一環としての写経を始めるに至りました。とはいえ有用な人材であったことには変わり無く、入唐僧(例えば**最澄**)なども、こうした在俗の経師を帯同しています。現在ではインターネットで楽々ゲットですから、一文字の重みがまるで違いますね。必要な情報が即座に入手できる利便性は貴重ですが、情報入手に臨む気迫の面では、現代人は古代人と比べますとずいぶん見劣りするかも知れません。情報化社会を謳歌する一方で情報洪水や情報過多に悲鳴を上げるとするのは、皮肉にも現代病と言うべきでしょうか。

さて、こうした経師の長(リーダー格)は「大^{だいきょうじ}経師」と呼ばれ、朝廷御用の特別な存在でした。大経師ともなれば同業者の組合長のような存在ですが、それ以外にも新しい暦を刊行する権利が与えられました。毎年11月1日、暦道の幸徳井氏・賀茂氏が編んだ翌年の新暦を受けて発刊をします。これは「大経師暦」と呼ばれ、木版摺りが始まった鎌倉期以降は目立って増加しました。庶民においても仮名文字を理解できる層が増え、また、農事・行事を行なうにも利用度は高く、それだけ需要が大きかったことが、暦の普及に拍車をかけたものと思われま

京都におきましても、安土桃山期には、この経師集団は「上京大経師」と「下京大経師」の二派に分かれて競っていたのです。江戸期に入ると、版元には大経師(浜岡家)と院^{いんのきょうじ}経師(菊沢家)の二つがあり、この二家に暦の発刊が任されていたわけです。但し、シェア的には前者の独占状態でしたので、京都が版元の暦(京暦)と言え大経師暦に代表されます。

大経師昔暦

ここで少し、近松門左衛門の浄瑠璃『大経師^{むかしごよみ}昔暦』に寄り道を……

この作品は天和3年(1683)に起きた実際の事件がモデルになっています。事件の大筋としては京の大経師以春の妻・おさんが、同家の手代・茂兵衛と通じ、やがて駆け落ちしたのが露見し、仲を取り持った下女・お玉と共に捕えられ、栗田口で処刑された、というものです。

以春) 大経師。お玉に懸想し、毎夜部屋にやって来る。但し、お玉は冷淡な態度を示す。
おさん) 夫(以春)の不行跡を知り、意趣返しを目論む。

一方、実家から金を無心する手紙が届き、夫には相談できず、茂兵衛を頼る。
茂兵衛) おさんから相談を受け、これも忠勤の一つと、主人には内緒で店の金を工面する。
お玉) 以春の行為には、困惑している。他方、茂兵衛に対しては好意を抱いている。

ある夜、おさんは、お玉になりすまして下女の部屋で休んでいる。もし以春が来た場合には、たしなめるつもりだった。ところが、実際にやって来たのは何と茂兵衛。お玉の気持を知って、忍んで来たのである。とどのつまり、あろうことか、おさんと茂兵衛が肌を交えてしまう……

以春は、金と不義密通の両方の件で、おさんと茂兵衛の二人を許すわけにはいかない。お玉は金策は自分の依頼だとして、茂兵衛への好意から二人をかばい立てする、という展開です。

「近松ならでは」と思わせる登場人物の色合い、また、話の組み立てになっていますが、近松の研究者の間では、大きく二つの疑問点が提示されてきたようです。ご紹介しますと下記の通り。

- | |
|---|
| <p>①いかに真暗闇な部屋の中とはいえ、寝所でも気付かないというのはあまりにも不自然だ。
現に、妻のおさんは、意趣返しのつもりで待ち構えていたはずだ……</p> <p>②事件は11月1日の夜のことであるが、この日は「影待ち」に当たる。夜を徹して潔斎を行い、日の出を拝む習慣のはずだ。さらに、大経師の店では新暦の発刊日でもあるから、店の者は一同揃って起きていたはずで、主人の妻が一人だけ部屋で休むなど考えられない……</p> |
|---|

研究者というものは、いろいろなところに目をつけるもので、ほとんど感心させられました。①については皆さんも私見はあろうかと思いますが、②などは専門家でないと気付きませんね。尚、当事件をいち早く取り上げて、小説として発表したのは井原西鶴の『好色五人女』でしたが、それより30年後、主人公の三十三年忌追善のために、近松が浄瑠璃として公演したそうです。

物語の舞台

この大経師は浜岡家であると思いますが、所在地は四条烏丸の交差点から南側にあったと言われています。大経師家は曆屋の総元締めとして家格も高かったわけですが、この密通事件があり、また、新曆の販売独占を図って改易(1684年11月頃)となったようです。家督は縁者の茂兵衛という者が継いで**降屋内匠**と名乗ることになり、以降幕末まで続いています。ちなみに、おさんと茂兵衛の石塔婆が、**日蓮宗寂光寺**(東山通仁王門の附近)の墓地内にあって、降屋家の墓石と並んで置かれているとのこと。尚、幕末頃には中嶋利左衛門と河合弥七郎の2名が京曆の版元に加わることになり、浜岡家、降屋家と合わせて都合4軒となっております。

また、**日蓮宗宝塔寺**(伏見稻荷神社の南方)の墓地内に、おさんと茂兵衛の墳墓と言われるものがあり、「妙法 宗有 妙正 霊」と刻まれているそうです。大経師家にとって当事件は不名誉なものではありませんが、先の寂光寺といい、弔いについてはそれなりに営まれたようですね。

家職

易しく言えば「家業」に近い言葉ですが、朝廷や幕府などから公認の許可を得ていること、また、位階(通常は七位程度の低いものではありませんが)を授かっている世襲的な職業を指すようです。大経師家もまさしくそうしたものであると言えます。

先述したように、木版印刷が普及してからは、経師の活躍の場が表装・表具関連に限定されるようにはなりましたが、それでも「京表具」というネームバリューは、なおも強いものがあります。例えば、茶道の**千家十職**(三千家が指定した十家十人の茶道具職方の名称)にも、釜師・茶碗師・塗師などとともに、**表具師(奥村家)**があり、なくてはならない存在です。

表具師の仕事で一番重要視されるのは「**裏打ち**」、つまり書画の裏側に紙を貼り付けることです。その際、最もポイントとなるのが「**糊**」の良し悪し。1年以上寝かせた古糊を使わないと、しわが寄ったり、ひび割れてしまいます。お酒と似たところがありますね、熟成?の妙味です。

巻物(軸装品)になれば、書画(本紙と呼ぶ)とともに丸めるわけですから、更に気を使うのです。というのは、丸めるということは、本紙は内側に、裏側の紙は外側に引っ張られるわけですね。通常は木製の軸を芯にして巻きますが、軸の直径の大きさによっても張力は異なってくるのです。もちろん、素材の紙あるいは布が何かということも大きな要素ですが、決め手は「糊」です。

そのようなことを考えると、京都が永らく都であったことは本当に大きい。必要な材料や素材(例えば紙、裂地、木、竹など)と技術力が集積しており、それぞれが容易に調達できるからです。

しかし近年では、経師の活躍の場は、寺社や茶の湯関連、あるいは美術品の世界に限定されて、洋風化が進んだ一般の生活の中では、襖・屏風・掛軸なども伝統工芸品の扱いとなっています。考えてみれば、「伝統工芸」という呼び方そのものが、日常の生活から遊離し始めた証拠ですね。敢えて申しますと、大きな意味で文化の継承と文化財保護とを混同しているのかも知れません。文化の継承とは、日常生活の中で使い、親しみ、馴染むこと。当たり前のものであること。歴史的な遺産を守るだけでは、文化財保護政策とは呼べても、文化政策とは呼べない代物です。

そういう意味では、京都あたりが一番危うい。歴史と文化の都、宝庫とほめそやされるから。文化と文化財の大きな違いに気をつけないとあきまへん。ほんとどすえ。